

以上は筆者の誤謬獨斷に基く所があるかも知れぬ。こもあれ著者が所謂啓蒙期の風俗史に對してこの書の刊行は大いなる意義があり、裨益する所大なるものがあるを信じて疑はぬ。(菊版 五九四頁、價 四・二〇、寶文館發行)〔寺尾〕

●日本思想史 上代國民の精神生活

文學博士 清原 貞雄著

數年前發行され世の注意を惹いた日本國民思想史の詳論の第一編として試みられたものである。總説、信仰生活、道德生活、知識生活、感情生活、建國の理想の五章に分れる。上代人の生活を斯く區別して組織化する事は上代人の精神活動から、また史料の性質から多少の不安がないでない。尤も著者もこの點注意して居られるのである。然し古代研究が斷片的のもの、多い時かゝる全體的な考察を加へらるる努力、を多ししその續篇の相次で現るゝ事を期待するものである。(菊版 本文 三六二頁、索引 一二頁、三・二〇、中文館〔藤〕)

●神話學論考 文學博士 松村 武雄著

紹介

「神話學の新展開」「日本神話に關する若干の考察」日本神話と民族文化「希臘宗教神話の文化史的考察」希臘宗教神話の近代的變容「北歐宗教神話の基督教化」フィランド宗教神話の研究の覺書」の論文集であるが、各々は著者が序文中にやがては神話學原論、日本神話の研究等に成長すべきものと云はるゝ丈に、充實した力作揃ひである。

第一のものは社會學派其他有力な諸派に互つてその學説の簡明な紹介と缺點の指摘があり、要を得た概念を得しめる。第二は日本神話に見る顯著な事象の數種について博き傍證による解釋がある。第三は神話にある古代文化を見るのであるが、それは神話其ものからの立論でなく神話を生み出した社會生活の考察であり、優れた日本古代文化史である。第四、五、六の諸篇に於ては一の神話體系が他の文化圏に抱含さるゝ時受くる變容が精緻なる考證によつて迎られる。これは文化一般の上に見る注意すべき問題であるがその一の場合が優れた方法によつて試みられてゐる。また日本神話の考察に際しても示唆

第十五卷 第一號 一三一

する所多いものがある。第七は宗教及び神話人類地理的研究の礎石なるものとされ、神話學、古代文化について近時輩出する類書の中最も學術的價値と興味の充實したものととして推賞したい。(四六版五五一頁、三・八〇同文館〔藤〕)

●明治  
成辰祭神一致の御制度 第叁號 (教法新  
定の二)

山口銳之助述

本篇は明治思想史上の一大轉機を劃せる神佛分離、廢佛を取扱へるものであり、一、神祇事務促進に付大阪京都兩局の交渉、二、興福寺社僧の復飾、三、石清水八幡宮及譽田山陵祭祀の沿革、四、石清水八幡宮の廢佛を内容としてゐる。

第一節に京都に在る植松雅言と大阪に出張中の白川神祇伯、龜井茲監兩人との間に往復せられたる明治元年神祇事務促進に關する書簡(龜井文書に據る)十七通を擧げその計畫、實行等宗教政策を示し、後節の説明を助けてゐる。第二節は元年三月早々着手實行せられたる興福寺社僧の復飾問題につき、其春日神社の地位よりして、之

に勤仕するものの、佛道より勤王道即ち神道に改宗すべきが王政復古の際に於ける當然の成行と觀じ、第三節には佛敎の中に古代祭祀の形式の殘存せるものととして石清水八幡宮及譽田山陵祭祀の關係並にその沿革を論じ、第四節に我が國祭政制度に重要な地位を占め、朝廷に於かせられても御崇敬あらせられた石清水八幡宮に對する國家の教法の斷定せられたこの場合に於ける神祇局の態度と社僧神官側の内部に於ける紛争放生會復活に關する經過等を叙して、その復飾に對する社僧等の態度の興福寺のそれと異なる點を擧げてゐる。あまりに無信仰、無氣力と誤解せられ、感情的に迫害せられたる佛敎の日本のなる方面に一解釋を試みてゐる。

吾人の容易に接せられざる龜井文書を驅使して明治元年の神祇局の指導精神を説き、早くも明治元年四月延暦寺に暴行をなしたる神職の組織せる神威隊を制し訓戒せるを見るは、神佛分離が後年如何にして廢佛毀釋にいたれるかを暗示せるものと云へよう。明治維新神佛分離史料と並讀せらるべき宗教思想動搖を窺ふ好資料である。